

## 山岡さんの退職に寄せて

久保田 正人

山岡さんとはじめて出会ったのは、いまから 27 年前のことでした。当時、山岡さんは教養部のフランス語教室に所属しており、わたしは教養部に赴任したばかりの「最年少」の新任教員でした。当時のフランス語教室は、外から見ると、一種独特の世界をつくっているように見え、同じ建物の同じ階に研究室がありながら、なかなか気軽に話をしにくいという雰囲気はありませんでした。教授会でもほとんど顔を合わすこともなく、そういう人がいるというくらい感覚でした。

ところが、ある時、フランス語教室に、見覚えのあるお顔の初老の方がいらっしゃいました。重信常喜先生ではありませんか。重信先生は私が学部のとときにフランス語を習った先生だったのです。どうして重信先生が千葉大にいらっしゃるのかいぶかしがっていたところ、なんとフランス語教室の先生だったとか。つまり名誉教授でいらしたのです。しかも、たいへん著名なフランス文学界の重鎮だとか。そんな偉い先生にフランス語を教わっていたのかと驚き、そのときはじめて山岡さんと少しの時間お話をしたのではなかったかと思えます。しかしながら、当時の私は、融通の利かない堅物だったので、フランス語教室の柔らかすぎる（と外部の人間には見えた）雰囲気になじめませんでした。そのため、それ以降も山岡さんとは特に親しくおつきあいするということはありませんでした。

山岡さんと親しくなったのは、外国語センターであらためて同僚になってからのことでした。いやに世の中のことがわかっているかのような特徴ある物言いに、半分、怪しみ、半分、憧憬しました。そのうち、この人はほんとうはすごい人なのではないか、隠れた大物ではないか、とすら思うこともありました。「ほんとうは」というのは、やはり半分怪しいからです。

外国語センターに配置換えになって 5 年後の秋に事件が起きました。当時の南塚信吾センター長が副学長になられ、多忙を極めたので、センター長代理を置くことになったのです。そのとき私は半年前に教授になったばかりでした。誰もが当然、相対的に年配であられる教授からその任に着く方が出るものとばかり思っていました。ところが、そのような方々がそろって身を引きはじめたのです。その中に山岡さんもいらっしゃいました。どこでどうなったのかあまり記憶が定かではありませんが、重要な会議に出なくてよい無権限の代理者ならということで、最終的に私がセンター長代理を務めることになりました。そして、半年後、南塚センター長が副学長職に専念されることになり、センター長の交替が避けられなくなりました。

ここで、私は山岡さんにセンター長の候補に名乗りを上げてくれるように話をしに行き

(8)

ました。一見すると、行政とは無縁の言動をとっていた山岡さんにセンター長のお願いをするというのは、傍目には奇妙と映るかもしれませんが、私は本気で頼んだのです。この時の依頼が本気だったことは、さらに4年後のある会合で山岡さんご自身もよく認識されたことと思います。結局、さまざまな事情で私がセンター長につくことになりましたが、部局長という、命を縮める役職につくの嫌がった山岡さんは、うまく逃げたなという感じでした。損のみあって得のないこんな役職につくほどバカじゃないといったところだったのでしょうか。いずれにしても、山岡さんにセンター長になってほしいと話をしにいったのは、私自身、いまでも誤りではなかったと思っています。山岡さんがセンター長であれば、外国語センターももっとよい形で存続し、教員同士ももっと緊密に連携しながら、教育と研究に邁進していったのではないかと、いまでも思っています。

山岡さんは、もちろん人によって好き嫌いがあるでしょうが、「小心を抱える大人(たいじん)」という言葉矛盾がびつたりの人物だと思います。しばしば断定的な物言いをされるのは、こわがりであることの裏返しでしょう。しかし山岡さんの断定的な物言いは、妙に説得力があるから不思議です。この物言いに接すると、そんなものなのかと思ってしまうところがあります。小者の断定とはちがって、なにかわからないけれども本質に触れているような感触があります。

外国語センターが廃止になる前の2年ぐらいは、山岡さんはよくセンター長室に差し入れを持ってきてくれました。私が甘党だと知っているから、差し入れは菓子類が多かったように思います。大きなポリ袋の中をガサガサまさぐりながら、いろいろなものを置いていってくれました。そしてしばし歓談しましたね。これがじつに楽しく心地よい歓談でした。こういう話し相手がいなくなるのは、いつもながら寂しいかぎりです。やはり人間は、直接間接に、誰かが見ていてくれるという安心感の中で過ごすのが一番心地よいのでしょうか。退職後の山岡さんはどうやって過ごされるのでしょうか。あまり楽しくなかったかもしれない職場でも、いざ退職すると、もしかしたら恋しくなるかもしれません。いつでも研究室のドアをノックしてください。